

博士学位論文審査要旨

2009年12月19日

論文題目：新聞論評漫画の社会的機能

学位申請者：李 其珍

審査委員：

主査：社会学研究科 教授 浅野 健一

副査：社会学研究科 教授 竹内 長武

副査：社会学研究科 教授 佐伯 順子

要 旨：

本論文は、今までメディア学の分野において研究対象として注目されなかった「新聞論評漫画」（一コマ、以下「論評漫画」）をジャーナリズム学の視座から扱い、その成立過程と機能衰退への過程を歴史的に探求し、今後のジャーナリズム創生へ向け独創的な問題提起を行った労作である。

「論評漫画」は英語で“Editorial Cartoon”と呼ばれるが、論者は日本における論評漫画の過去と現在のあり方を、先行研究を踏まえたうえで、膨大な量の原資料に当たり実証的に探求した。

論者の基本姿勢は、今の論評漫画がなぜ本来持つ批判精神を失い、新聞ジャーナリズムの中でも軽視されてきたかを究明するものである。

第一に、民主主義社会においてジャーナリズムに求められる役割として「権力監視機能」を重視し、社会的弱者や少数者の側に立つことが期待されると見て、論評漫画が権力関係から生じる矛盾や不正を公に提起し抵抗するための手段として有効であると論者は考察する。第二に、メディア効果研究で使われる「議題設定機能」理論を取り入れて、論評漫画のジャーナリズム機能を解明し、論評漫画は社会が抱える諸問題を議題として設定し、問題解決への道筋を提示することで存在意義を発揮すると考える。

論者は、新聞論評漫画を漫画の一ジャンルあるいは個別の表現手段と見るのではなく、その社会的機能をジャーナリズムの論評活動から見出した。また、主に歴史的アプローチを通して、特定の時代のジャーナリズム状況が論評漫画のあり方にどのように影響してきたかを、時代別に具体的に分析した。

論者はまず、明治期の自由民権運動期における論評漫画が「風刺漫画メディア」を通して独自に積極的なジャーナリズム活動を展開し、大新聞・小新聞における政治風刺漫画の最盛期を迎えた過程を詳細に実証し、新たな知見を提供した。

日清・日露戦争の時期においては、商業主義の影響もあり、論評漫画の機能の歪曲が始まり、次第に批判精神を失っていった。1930年代のファシズム期、そしてアジア太平洋戦争期においては、皇国史観・大東亜共栄圏のプロパガンダの道具へと墮落していった。敗戦後、戦時中に戦争に協力した漫画家の戦争責任が問われることもなかった。

論者は以上のような調査研究をもとに、日本の新聞論評漫画の衰退原因とジャーナリズム状況との関連性について新たな知見を提供した。そのうえで、論評漫画が正しく機能するためには①大前提として、新聞ジャーナリズムの自省と社会的責務の履行②新聞編集者の認識と掲載システムの改善③大手メディア以外に新たな活動の場を探求すること④論評漫画の学術的な研究が独立して行なわれ、新聞界へ絶えず提言していくこと一が必要と提示している。

漫画という媒体の特異性、海外の論評漫画との比較研究などは今後の研究を待ちたい。

本論文は、日本におけるジャーナリズム及び新聞漫画の置かれた現況を懐疑的かつ批判的な姿勢で捉え、真摯に問題を提起しており、現況を把握するだけでなく、問題解決のための実践的な提言を行っていることから、社会参画型の学問成果として高く評価することができる。

よって、本論文は、博士（メディア学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。（了）

総合試験結果の要旨

2009年12月19日

論文題目： 新聞論評漫画の社会的機能

学位申請者： 李 其珍

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 浅野 健一

副査： 社会学研究科 教授 竹内 長武

副査： 社会学研究科 教授 佐伯 順子

要 旨：

2009年12月19日、午後1時半から3時まで、溪水館1階会議室において学位申請者による公開学術講演会を行った。引き続き、上記審査委員3名によって午後5時から6時30分まで、溪水館1階メディア学科資料室で約1時間半にわたり、申請者に対して口頭試問を行った。申請者は本論文の内容に関する的確に答え、またジャーナリズム、マス・コミュニケーション研究の関連領域に関する知識と見識を持って応答した。

また、同時間に行った語学試験（英語・日本語）の結果、語学に関する十分な学力を有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：新聞論評漫画の社会的機能

氏名：李其珍

要旨：

●研究の基本姿勢と新聞論評漫画の位置付け

本研究は、日本の新聞論評漫画がなぜ衰退したかを問題提起し、その答えを探るために、論評漫画の社会的機能を理論的および歴史的考察から議論したものである。新聞論評漫画の衰退原因と考えられる様々な要素の中で特に、それが掲載される媒体である新聞ジャーナリズムとの相互関連性に注目して歴史的経緯とジャーナリズムとしての機能を追究した。要するに新聞論評漫画を漫画の一ジャンルあるいは個別の表現手段に見るだけでなく、新聞ジャーナリズムの構成要素に位置付けて、その社会的機能をジャーナリズムの論評活動から見出したのである。新聞論評漫画が漫画として持つ表現的特徴はコミュニケーション過程での独自で効果的な作用をすることはすでに多くに研究で明らかにされている。つまり漫画という表現手段は「誇張」と「省略（単純化）」の特徴的な技法によって意味をより分かりやすく伝えることができる媒体であること、そしてメディアとしての漫画は受け手とのコミュニケーション過程で非常に優れた作用をするということである。本研究ではこのような漫画固有の特徴が新聞ジャーナリズムの中でどのような機能を果たし、いかなる役を担うかを考察することで、論評漫画をジャーナリズムの脈絡で新たに位置づけようとした。象徴的な視覚表現物としての漫画は、これまで新聞紙面において娯楽的な機能をもたらす要素として認められてきたが、一方で独特の「分かりやすさ」がもたらす説得力のゆえに論評としても優れていると言える。従って新聞論評漫画は論評領域における、絵と文字で駆使された、独特な表現様式を持つ論評記事だと定義できる。

●新聞論評漫画への歴史的アプローチ

本研究は主に歴史的アプローチの手法を通して、特定の時代のジャーナリズム状況が新聞論評漫画のあり方にどのような影響を及ぼしたかを具体的に確認することに注力した。まず第一章で新聞論評漫画の衰退現象を問題提起し、現況について述べた後、続く第二章で、新聞論評漫画の概念を整理しつつ、それが誕生するまでの歴史的経緯を、欧州と日本の近代ジャーナリズム史の中で簡略に触れた。それから第四章から第八章にかけて日本における近代期の新聞論法漫画の足跡を詳しく追った。特に主眼を置いたのは、近代新聞ジャーナリズムの動向と時代の社会状況の中で新聞論評漫画がどのように影響を受け、変容していたかという点である。1868年、『江湖新聞』にはじめて日本人による新聞漫画が現れて以来、時には読者獲得の手段として、時には緊迫した政局の報道のために、そして、新聞社の政治理念を大衆に伝えるために役割を果たしてきた歴史をここで確認することができる。

●新聞論評漫画の社会的機能に関する理論的背景考察

歴史研究に本格的に取り組む前に、新聞論評漫画の社会的機能を明らかにすることに役立つと考えられる理論を検討し、ジャーナリズムとマス・コミュニケーション効果研究の仮説から、権力監視機能と議題設定機能を取り上げて論じた。第一に、新聞論評漫画はジャーナリズムの権力監視機能を果たす有効な方法である。ジャーナリズムは政治的・経済的権力をもつ者に対し、権力を持たない社会的弱者や少数者の側に立って言論を行なうためにある。新聞論評漫画における

風刺精神は基本的にあらゆる権力や権威に対する批判・抵抗の姿勢に基づいている。したがって新聞論評漫画は権力関係から生じる矛盾や不正を公に暴露し抵抗するための手段として、ジャーナリズム活動を行なうことができる。第二に、マスメディアの議題設定機能から新聞論評漫画のジャーナリズム機能を見出すことができる。ジャーナリズムは市民社会が民主的に運営されるように、適切に社会が抱える問題を議題として設定し、自ら議論の場を務めるのみならず、情報の収集と流通を通して、問題解決の道筋を提示することで存在意義を発揮するのである。そして新聞論評漫画は漫画のもつ特有の手法で、政治経済や社会問題の重要な事案を的確にとらえ、それをもって人々の間に議論を巻き起こす力を持つのである。

これらの理論的検討は現代社会においてジャーナリズムに求められる規範的機能から新聞論評漫画の社会的機能を見出す試みであった。新聞論評漫画の危機的状況に対する解決策を探るためにも有効な視座を提供することができると思う。

●社会状況とジャーナリズム、そして新聞論評漫画の利用と変容

ところで、権力監視機能は同機能が完全に封殺される時代においては逆に権力側に利用されるといった側面も持つ。文学や映画など、他の文化分野に対しても同じことが言えるが、権力側が社会コントロール手段として漫画を用いることである。戦時下のプロパガンダに使われることが代表的な例である。近代的印刷技術の誕生以来、このような現象は頻繁に起こっている。日本の近代戦争とアジア太平洋戦争を含む15年戦争の時期を例にみれば、漫画界の時局追随と権力への服従の歴史がよくわかる。それを確認するために本稿の第六章で日清・日露戦争期の新聞論評漫画の動向を、そして第八章でアジア太平洋戦争期の漫画界の翼賛活動とその後の動向を調べて論じている。日清・日露戦争期は近代的な新聞論評漫画が確立していく時期と重なっており、以降、今日まで続く日本新聞論評漫画の流れをある程度方向付けたと考えられる。その時期に新聞ジャーナリズムは量的膨張を遂げたし、商業主義の大衆新聞という言論地形を形作った。そのようなジャーナリズム環境の最中で、新聞論評漫画は紙面での地位を得て活動を広めることになるが、内容的には風刺・批評精神が貧弱化し、矮小化されることになってしまった。

しかし、問題は戦時下の状況だけに留まらない。アジア太平洋戦争以降の状況がそれを物語っている。戦後の新聞論評漫画は本来の精神を回復させることができず今日に至っている。新聞ジャーナリズムの商業主義への変質は既に近代中期から進んでいたから、新聞がアジア太平洋戦争期の国家的狂気の時代を抗わずに生き抜く道を選んだのは驚くことでもない。ところが敗戦後に日本社会が民主主義システムを整えていく中で、新聞ジャーナリズムが過去の習性に対する一切の懐疑的な姿勢も見せずに、そのシステムのままここまで続いてきたことで、論評漫画の存続にかかわる現在の危機的状況を作った。社会システムは変わってもジャーナリズムの本質は変わらず続いてきたのだから、新聞論評漫画が本領の機能で働けず、衰退してしまったことも当然な結果なのかも知れない。

●新聞論評漫画が十分に機能するためには：役割と責任

では、新聞論評漫画が本来の精神を取り戻して社会にその機能を十分果たすためにはどうすれば良いのか。やはり大前提は論評漫画を構成要素とする新聞ジャーナリズムの直面している問題に目を向けることである。歴史的経緯への考察から、新聞論評漫画がジャーナリズムのあり方から自由なものではないことが明らかにされた。もちろん他にも論評漫画の発展や衰退に影響する要素はある。大きくは社会認識や思想の問題から、印刷技術やメディア環境の変化、漫画分野の動きからも多かれ少なかれ影響されるだろう。そして内部的には漫画家の資質や認識問題、漫画家教育（養成システム）などの問題が挙げられる。しかし最も直接的に関係しているのは新聞ジャーナリズムである。第一に新聞ジャーナリズムが論評漫画を必要としているか。ここでは新聞編集者の論評漫画に対する認識も重要である。もっとも、新聞論評漫画の存続は新聞ジャーナリ

ズムそのものが社会に正常に機能しているかにかかっているという過言ではない。権力監視や議題設定機能など取り上げた論評漫画の機能はまさにジャーナリズム本来の機能であるから、ジャーナリズムが社会的機能に対する自覚を持っていない限り、すべて机上の空論にすぎないのである。だから日本の新聞論評漫画を復活させるためには日本の新聞ジャーナリズムが正常に機能しているかどうかを先に追究しなければならない。だからこそ、新聞論評漫画研究は、新聞ジャーナリズムのあり方を解明する作業にならなければならない。

本研究では最後に第九章で新聞論評漫画と表現の自由について考察した。表現の自由といえば民主主義社会においてもっとも守られるべき最大の価値として理解されている。そしてジャーナリズムは言論の自由の保障された条件で権力監視の役割を果たし、市民の知る権利を守るのである。だから、人類歴史において表現の自由を獲得してきた過程は戦いの歴史そのものであったという過言ではない。論評漫画の質も社会における表現の自由の保障範囲と深く関係している。新聞論評漫画の表現にいかなる圧力がかけられるのかによって、その社会の言論の自由がいかに生きているかを測ることができる。しかしジャーナリズムは自由を享受する一方で大きい社会的責任を負う。責任への自覚がないと、言論の自由が政治的主張や営利の目的で悪用されることも起きる。新聞論評漫画は言論の自由の試金石であると言われる。本研究では、表現に一定の社会的責務が伴われることを思い知らされたムハンマド風刺漫画事件を題材に、ジャーナリズムという範疇における表現の自由とは何を意味するのか、当時の議論の構造に深く踏み込んで議論した。

メディア学における新聞論評漫画の本格的な研究はまだ始まったばかりであるように思う。しかし、今はじまったばかりであるからこそ、これからこの分野の研究の領域は無限なほど広がっていると思う。これからも後続研究を通して、新聞論評漫画研究の領域を確立させるのに役立ち、ジャーナリズム研究の一環に位置付ける取り組みを続けていきたい。